犬になったぼく

鱗岩　忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
犬になったぼく

【Ｎコード】
Ｎ００７４Ｚ

【作者名】
鱗岩　忍

【あらすじ】
ある日、ぼくは学校でひろった子犬と、心が入れ替わってしまう。動物が大嫌いなママは、ぼくを家から追い出すが・・・。。。

1　犬になったぼく（前書き）

この物語はフィクションですが、真実を描いています。

1　犬になったぼく

1　犬になったぼく

ぼくはタロウ。
でも、なぜだか分からないけど、ジロウになっちゃってるみたいなんだ。
わけが分からないって？
ぼくにだって、まったくわけが分からない。
自分自身の頭のなかを整理するためにも、順を追って考えてみよう。
まず、ぼくは小学三年生だ。
ごくふつうの町のごくふつうの小学生。
人より体が小さくて、列をつくって並ぶときには、いつも一番先頭に立つ。
クラスでは、いきもの係をやっている。
ふつう、係は入れ替わるものなんだけど、ぼくの場合はずっといきもの係だ。
学校では九官鳥を飼っている。
それからうさぎも。
にわとりも。
亀も飼っている。
ぼくはそういった小動物が大好きだ。
犬も好きだし、猫も好き。
でも、ママはぼくと正反対。
動物が大嫌いなんだ。
ぼくはうちでも犬を飼いたいと思っているが、ママが反対するからダメだ。
パパはぼくと同じ意見なんだけどね。

将来は獣医かペットショップの店員になりたい。
だから、いきもの係は将来のための勉強でもある。
学校の勉強は苦手だけど、こういう勉強なら全然苦にならない。

ある日の放課後、ぼくはうさぎ小屋の裏で一匹の子犬をみつけた。

まだよちよち歩きが抜けない小さな柴犬だった。
痩せて、ひどく汚れていた。
たぶん、学校の周りを流れるどぶ川に落ちたんだと思う。
抱いてみると、ちょっと臭った。
でも、ぼくには可愛くて仕方がなかった。
そこで、深く考えもせずに、家に連れてきてしまったんだ。
ママに見つかれば、捨ててこいと言われるだろう。
だから、ぼくはぼくの部屋に隠して飼おうと決めた。
ぼくは、この犬をジロウと名付けた。
ぼくがタロウだから、ジロウはぼくの弟分だ。
ジロウを見つけたときに、給食の残りのパンをあげたので、エサはまだやらなくていい。
だから、次にやるべきことは、ジロウを洗ってやることだ。
ママは、台所で夕飯の支度中だから、風呂場に近づくのは容易だった。
夕べの残り湯を洗面器にたっぷり入れて、ぼくは2階の部屋に向かった。
部屋ではジロウが隅の方で震えていた。
かわいそうに。
早くきれいにしてあげて、タオルにでもくるんであげなければ。
そう思って、ジロウを洗面器に入れた途端、世界が変わった。
少しめまいがして、目を閉じた。
次の瞬間、洗面器のなかに入っているのは、ぼくの方だった。

目の前には、ぼく自身が笑ってこっちを見ている。
天然パーマ。
度の強い眼鏡。
しもぶくれの顔。
生まれたときからおなじみのぼくの顔がそこにあった。
向かい側のぼくは、笑いながらぼくにこう言った。

「うまくいったぞ。今日から君は犬のジロウだ」

とても意地悪な笑顔だった。
ぼくは、すごく恐かった。
その笑顔を悪魔のように感じた。
なによりも、その顔がぼく自身だからもっと恐かった。
その場にいたたまれなくなって、洗面器を飛び出すと、半開きのドアに体当たりした。
そして、あわてて階段を下りると、途中から転げて滑り落ちた。

トントントン…。

体が小さかったから、あまり大きな音はしなかった。
でも、ママは物音に気付いて台所から出てきた。
ぼくは夢中になって、ママに駆け寄った。

「ママ、ママ！　大変だ。部屋に変な奴がいるよ」

ママはぼくを見ると、身を固くして立ち止った。
そして、ママに向かって飛び付いたぼくを、思い切りはねのけた。

「きゃん！」

ぼくはまるで子犬みたいな鳴き声を上げて、廊下に叩きつけられた。
骨が折れたかと思った。
それ以上に、ママの行動にショックを受けた。
ママにはぼくが分からないらしい。
玄関先の鏡には、今のぼくの姿が映っている。
そこに映っているのは、まぎれもなくジロウだった。
さっきぼくが洗面器に入れて洗ってあげようとしていたジロウ。
痩せて、泥まみれではあるが、クリクリとした可愛い目と、一回転した愛らしい尻尾を持つ柴犬のジロウだった。
立ち止まって鏡を見つめるぼくに向かって、ママは手許の箒を振り回した。

「ちょっとアンタ、出ていきなさい！」

箒の先が、ぼくの体に当たってチクチクした。
ママは、そうやってぼくを追い出そうとしたが、負けるわけにはいかなかった。
こんな状態で追い出されたら、大変だ。
はらぺこで力が出なかったが、右へ左へ箒をかわして、なんとか耐え抜いた。
しかし、2階から、ゆっくりと“ぼく”が出て来る。

「どうしたの、ママ。その薄汚い犬はなに？」

ママはその声を聞いて、“ぼく”に対してこう言った。

「タロウ、あんたちょっと手伝いなさいよ。この犬を追い出して」

この一言で、ぼくの気持は折れた。
ママにはぼくが分からない。

ママは、偽物の“ぼく”をぼくだと思っている。
そして、二人してぼくを追い出しにかかっている。
この事実を突き付けられたとき、ぼくはされるがままになった。
ママの箒に押され、“ぼく”の足に蹴られて、ぼくは玄関先から外へ転げ出たんだ。
今ぼくは、はっきりと分かった。
ぼくは犬になった。
犬のジロウになっちゃったんだ。

2　隣のチビ

これからどうしよう…。
訳が分からないままに追い出されてしまったぼく。
町の表通りをさ迷うが、どう考えても分からない。
気になるのは、あのときのジロウの言葉だ。

「うまくいったぞ」

…ってことは、これは罠だったってことだ。
あんなに可愛い柴犬が、ぼくを罠にはめるなんて。
しかし、ただでもあり得ないことが起こってるんだ。
常識で割りきれるわけない。
とにかくこれから先どうやって生きてゆくのか。
まずはそれを考えなきゃならない。
そのとき、お腹がグーッと鳴った。
さっき給食の残りのパンを食べたばかりだったけど、焼け石に水だった。
ジロウはどうやらここ数日なにも食べていないようだ。

「お腹が空いたなあ」

思わず口に出したが、実際に流れ出た声は、

「く～ん、く～ん」

という子犬の鳴き声だった。
食べ物を探さなくちゃ。
でも、のら犬というのは、どうやって食べ物を見つけるんだろうか。

猫ならすずめでもねずみでも捕りそうなものだけど。
第一、動物が大好きなぼくが、小鳥なんかを殺せるわけがない。
できれば、パンやごはんを食べたいものだ。
そんなことを考えて歩いていると、向こうから知った顔がやってきた。
ぼくの家の隣に住んでいるおばさん。
そこで飼われているヨークシャーテリアのチビだった。
ぼくはずっと犬を飼いたかったから、いつもおばさんがうらやましいと思っていた。
こんなに可愛い犬を飼えたらいいのにな。
いつもそう思っていた。
それで、チビのことは随分と可愛がった。
おばさんがいいと言わないので、食べものをあげることはできなかったけど。

「やあ、チビ。ちょっと相談があるんだけど」

ぼくはチビに近づいていった。
道の向こう側では、八百屋さんが大声で怒鳴っている。
今日は、大根が安いらしい。
おばさんは、八百屋の声に夢中だったから、ぼくがチビに近づいても気がつかない。
チビは、ぼくに気づくと、しかめっ面でこう言った。

「あんた、誰？」

ぼくは絶望的な気持ちになった。

「ぼくだよ。隣のタロウ。分からない？」

「タロウは人間だろ？　あんたは柴犬じゃないか」
「実は今日、柴犬を拾ったんだけど、どういうわけか心が入れ替わっちゃったんだ。こんなことって聞いたことある？」
「あるよ。知らないの？　ケケケ…」
チビは、意地わるそうに笑って言った。
「どういうこと？　よくあることなの？」
チビは、怪訝そうな顔をして、
「本当に知らないのか。　…ってことは、お前は本当にタロウなんだな！」
「だから、そうだって言ってるじゃないか」
ぼくは面倒になって声を荒げた。
実際に出た声は、
「ウー、ワンワンワン！」
という唸り声だったけど。
この声を聞いて、おばさんがこっちに気付いた。
「まあ、なんでしょう。この汚い犬は。あっちへ行って！　シッシッ！」
おばさんは太い足で、ぼくを追っ払おうとした。

チビは何かを知っている。
どうしても聞き出したかったけど、いまは無理そうだった。
おばさんの足蹴りにはとても敵わなかった。
そのとき、チビが叫んだ。

「知りたかったら、夜、うちに来て！」

それを聞いて安心した。
夜になったら理由が聞ける。
こんな状況に陥った理由。
それまで生きていればの話だけど。
町の人がこっちを見ている。
チビから離れたから、おばさんの追及からは逃れたけど、通行人は皆こっちを見ている。
早くここから離れなきゃ。
ひと目につかないように。
もう夕暮れ時だ。
夜までもう少し…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0074z/

犬になったぼく

2011年12月1日17時55分発行